

## 第2 問題作成部会の見解

### 1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 英語以外の外国語については、大学入試センター試験の枠組みを受け継いだ『筆記』テストを課し、「リスニング」テストは実施しない。
- 教科としての外国語科の目標である「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」に基づき問題作成を行う。  
また、実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面、状況の設定を重視する。
- 問題作成に当たっては、CEFR等を踏まえた力を問うことをねらいとして作成する。  
その際、大学教育の基礎力を踏まえ、また、高等学校において英語以外の外国語を初めて履修する者もいることを考慮し、問題作成を行う。

### 2 各問題の出題意図と解答結果

センター試験から共通テストへの移行に伴い、大問ごとに問うポイント（文法・語彙など）を明確にするとともに、資料の読み取りや長文の読解に重点を置く問題構成とする変更を行った。

これまでのセンター試験における問題作成の大枠と良問の蓄積を受け継いだ上で、基本的知識を問う問題と、思考力・判断力・表現力等を問う問題のバランスに配慮し、問題の数、配列、配点を見直した。具体的には、語彙問題の数を減らし、設問形式も語彙知識を直接問うものから、語句の用法に基づいて正解を導くものに変更し、語彙問題減少分を読解問題に重点化して配分した。また、大問の配列を、発音、文法、語彙・表現、整序作文から意味内容、読解へと問題の漸進性に配慮して変更した。今年度もこの形式を踏襲して問題作成を行った。

なお、フランス語の表記は従来からの正書法に従っているが、近年フランスの学校教育に導入された新たな正書法とそごが生じないように配慮した。最近の傾向を踏まえ、また受験者に分かりやすくととの配慮から、大文字にもアクセント記号を付けている。

#### 第1問 発音問題

つづり字の読みを通して、「聞く、話す」能力の基礎となるフランス語の発音に関する基本的知識を問う問題である。つづり字と発音の関係の理解度を試すために、できるかぎり多様な出題を心がけた。リエゾンについての知識を問う問題では、語句レベルのリエゾンも積極的に扱うこととした。基本的な発音の規則を正確に把握していれば容易に正解に到達できるものと思われる。

問1は語頭と語中「e」の発音を問うもので、正答率が高く、識別力も十分なものであった。問2は「ch」の発音を問うもので、特に正答率が高く、8割を超えていた。問3は語中と語末の「m」の発音の有無を問うもので、正答率が高く、識別力がよく出ている。問4は語末の「z」の発音を問うもので、正答率が高く、識別力も十分なものであった。問5は「語末の子音と後続する単語の語頭の母音のリエゾンの規則」を問うものであった。高等学校教科担当教員より難易度が高いという指摘を受けたが、正答率は十分であった。

#### 第2問 語形変化の問題

語形変化を文法・語彙の知識と関連付けて問う複合的問題である。できるだけ多様な品詞にわたって出題するよう配慮した。文法、つづり字に関する基礎的な知識を広く試すよう努めた。

問1は形容詞 *énorme* から副詞 *énormément* を問う問題であり、正答率は5割程度であったが、

識別力は十分だった。問2は過去分詞 *permis* から名詞 *permission* を問う問題であり、正答率、識別力ともに高かった。問3は過去分詞 *vécu* から動詞の単純未来形 *vivront* を問う問題であり、正答率は7割弱で識別力が高い問題であった。問4は名詞 *mois* から形容詞 *mensuelle* を問う問題であり、消去法により正解に至ることが難しかったためか、正答率は4割程度であった。問5は動詞 *lire* から形容詞 *lisible* を問う問題であり、正答率は約3割と低かったが、識別力は高かった。

### 第3問 文法の問題

文法に関する基本的知識を問う問題である。基本的な文法事項を、偏ることなく、広く問う多様な問題の作成を心がけた。また、他の問題と同様、問題文についても、実際に使われる自然なフランス語になるように配慮した。

全体的に識別力は高かったが、正答率の低かった設問が幾つかあった。冠詞や所有形容詞の基本知識を問う問3の正答率はやや低かったが、文脈をしっかりとらえないと正解にたどり着けない問題であったことに起因するものと考えられる。問4は、正しい時制を選ぶ問題であったが、この大問の中では正答率が一番低かった。この問題の文中で使われている語彙の難易度が高かった点や文脈なく大過去から文が始まる点が、一部の受験者にとって難しかったと思われる。問7は、一見基本的な関係代名詞の問題であるが、文中における正答選択肢の *dont* の用法が難しく、解答が他の複数の選択肢に分散した。一方で、その他の問題については、基本的な文法知識を問う問題で、正答率は安定していた。

### 第4問 語彙・表現の問題

語彙・表現に関する基本的知識を問う問題である。与えられた文脈の中で、基本的な言い回しや慣用表現・熟語に関する知識を問う問題の作成を心がけた。また、他の問題と同様、問題文についても、実際に使われる自然なフランス語になるように配慮した。

識別力は総じて高かったが、正答率には若干のばらつきがみられた。例えば、*une file d'attente* という熟語表現を問う問2は、誤答の *ligne* と正解の間で迷う受験者が多かったものと推測される、難易度の高い問題であった。動詞 *laisser* の基本語義を問う問6においては、直後の *en paix* という熟語から *mettre* との組合せを連想する受験者が思いのほか多かったからか、正答率が低かった。一方、問1と問5は、受験者の語彙知識レベルが正答に至るかどうかを端的に左右する問題となっていた。

### 第5問 対話完成問題

与えられた会話の一部から、日常生活における自然な状況を判断し、対話を完成させる問題である。具体的で想像しやすい場面や状況を設定しつつ、内容が多様なものになるよう心がけた。また、できる限り明解なフランス語による表現を採用した。さらに、会話の一部だけを読んで正答を導くことができる問題ではなく、会話全体を読まなければ正答できない問題を作るようにした。

問2は、最後の会話文の意味を細部まで正確に読み取る必要があるため、難易度が高かったように思われる。誤答したケースでは、*Et pourtant* の *pourtant* の理解がやや難しかった可能性や、*Et* とのつながりで肯定的な意味と理解された可能性が考えられる。また、正答である④のみが否定的な意味合いを含んでいたが、それが選択の難しさにつながった可能性も考えられる。一方、問1、問3、問4及び問5は正答率が高く、比較的容易に正答できる問題であるため、全体としての難易度は適切であった。

### 第6問 整序作文問題

例年の出題形式・傾向どおり、与えられた日本語を手掛かりに、平易な語彙・表現を用いて

フランス語で作文する能力を測ることを目的としている。問題の日本語文は、自然でありながらも正答を導きやすいものとなるよう配慮した。正しい語順を理解していなければ正答とならないよう工夫するとともに、空欄の位置によって難易度を調整している。

問2は、日本語の「もう少し」と「もっと」に対応させるため、比較級の meilleur と plus が選択肢に含まれており、用法や語順のしっかりとした理解が問われている。低い正答率であったものの、識別力は高かった。

#### 第7問 資料・会話読解問題

図や表を用い、日常生活や身近な問題についてフランス語の知識・読解力を問うとともに、それに基づいた思考力・判断力を試す問題である。受験者にとって親しみやすい題材となるよう心がけるとともに、図表等の資料に基づく適当な分量の文章又は会話とした。AとBの中間に分かれ、それぞれ、資料に基づいた会話を提示し、資料と会話を関連付けながら状況を読み解く能力を問うている。具体的には、Aは「電動アシスト自転車の取扱説明書」、Bは「観光協会が提供しているスキープランの案内」を題材とした。

その結果、おおむね適切な正答率となり、総じて識別力は高く保たれた。Aについては、問1は会話文を読み二か所の空欄を補充する問題、問2は会話文を読み、空欄一か所を補充する問題、問3は人物の行動と資料の内容との整合性を問う問題とした。Bについては、問1は会話文を読み、空欄一か所を補充する問題、問2は資料の内容に基づいて、推論によって解答を導き出す問題、問3は書かれたメールを読み二か所の空欄を補充する問題、問4は人物についての記述と資料の内容との整合性を問う問題とした。

いずれも受験者のフランス語読解力を試す上で、適切な問題であったと思われる。

#### 第8問 長文読解問題

論旨が明快で論理に一貫性のある文章を素材として選び、事柄の因果関係や対立などを正確に読みとる力や、文意を正確に把握する力を測る問題である。従来の出題方針を踏襲し、なるべく平易な表現を使った読みやすい題材を選択すると同時に、常識だけで正答にたどり着けるような問題や、単語や成句の知識を問うだけの問題は排除するよう心がけた。さらに、時代に即した内容としながら、論旨を追いやすくするよう十分に配慮し、論理の展開に即して内容を把握できているかを試す問題を設けた。その結果、思考力・判断力を的確に測ることが可能な問題となった。

全体的には、識別力の高い問題であった。問1は文脈を正しく理解した上で語彙を選択する問題、問2は空欄に入れるのに適切な文を前後の内容から判断する問題、問3は下線部の内容を表す別の表現を選ぶ問題、問4は下線部の具体例として適切でないものを判断する問題、問5は接続語句を選択する問題、問6は最終段落の空欄に入る適切な語句を選択する問題、問7は本文の内容と一致する文を二つ選択する問題、問8は本文の内容から適切なタイトルを選択する問題であった。第8問全体の平均点は昨年に比べごくわずかに下がったものの、内容の理解度が多角的に測られる問題となっていた。

### 3 ま と め

以上、問題作成方針、問題形式と内容、高等学校教科担当教員から寄せられた意見を踏まえて解答結果を分析・検討し、問題作成部会としての見解を述べた。

今回の試験については、識別力の高い問題が多く、幅広い受験者層への対応が的確であったと判断できる。難易度としても試験の目的にかなうものであった上、標準偏差の高さが示す通り受験者の得点は平均点から十分な散らばりを伴う分布をなしていた。今後も高等学校における学習範囲を

逸脱しない適切な出題内容を心がけ、極度に難易度の高い問題や出題傾向の偏りを避ける配慮を維持しつつ、共通テストとして完成度の高い問題を作成し続けることを継続目標としたい。

なお、高等学校教科担当教員の方々を始め、各方面から有益な御意見を頂いたことに末筆ながら改めて御礼を申し上げたい。